

「教職実践演習」の成果と課題に関する検討：
静岡大学教育学部における2013年度の取り組みを通じて

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-10-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 長谷川, 哲也 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00009201

「教職実践演習」の成果と課題に関する検討

－静岡大学教育学部における2013年度の取り組みを通じて－

Achievements and Issues of “The Practical Seminar for Teaching Profession”:

Through the Action of the Academic Year of 2013 in the Faculty of Education, Shizuoka University

長谷川 哲也

Tetsuya HASEGAWA

（平成26年10月2日受理）

The purpose of this study is to clarify achievements and issues of the practical seminar for teaching profession that have been carried out in the Faculty of Education, Shizuoka University. The revision of Teacher's License Law, the practical seminar for teaching profession have been introduced as a required subject for those who seek a teaching license from the academic year of 2013. This subject is placed as the compilation of all the learning of four years at the university, and it is expected as to guarantee the quality of the teacher's license. The subject has been already carried out in front of becoming it a required subject at some universities, and the case studies have been accumulated. This study shows an overview of the practical seminar for teaching profession that has been carried out in the Faculty of Education, Shizuoka University. And this study is to analyze the result of the questionnaire that was carried out in the students after class, and is to discuss achievements and issues of this subject. The main findings that this study provided are as follows. First, the evaluation of students to the implementation methods of the practical seminar for teaching profession is high, and the evaluation of students to having been accomplished through the practical seminar for teaching profession is high. Second, the evaluation of the student to teacher training course portfolio and prior explanation of the practical seminar for teaching profession is low.

1. はじめに

2006年の中央教育審議会（以下、中教審）答申「今後の教員養成・免許制度の在り方について」では、今日の教師教育改革に大きなインパクトを与える重要な施策である教職大学院の設置、教員免許状更新制の導入、教職実践演習の新設が提言された。大学院段階における教員養成や現職教育の高度化を目的とした教職大学院については、2007年3月の「専門職大学院設置基準等の一部を改正する省令等について—『教職大学院制度』の創設について—」の公布を経て、2008年4月より全国の19大学で教職大学院がスタートし、2014年現在では25大学で設置されている。また、教員に必要とされる資質能力の刷新とその確認を目的とした教員免許状更新制については、2007年6月の「教育職員免許法及び教育公務員特例法の一部を改正する法律」

により法制化され、2009年4月より教員免許状更新講習が実施されている。一方、学部段階において導入が提言された教職実践演習については、2008年11月の「教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令」により「教職に関する科目」として同科目が新設され、2010年度入学生より必修化されている。

上記の2006年中教審答申によれば、教職実践演習とは「学生が身に付けた資質能力が、教員として最低限必要な資質能力として有機的に統合され、形成されたかについて、課程認定大学が自らの養成する教員像や到達目標等に照らして最終的に確認する」科目であり、学部段階における「学びの軌跡の集大成」と位置づけている。教員養成に関するこれまでの各種答申等では、各大学が養成しようとする教員像が明確でないことや、学生に身につけさせるべき資質能力についての理解が十分ではないことなどを指摘しており、教員養成に対する批判や反省のもと、実践的な資質能力ベースでの出口管理を実施しようとするものが教職実践演習であるといえる（高橋 2008）。

このような趣旨から教職実践演習では、①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項、④教科・保育内容等の指導力に関する事項という4事項を含めるべきとしている。また授業内容については、「課程認定大学が有する教科に関する科目及び教職に関する科目の知見を総合的に結集するとともに、学校現場の視点を取り入れながら、その内容を組み立てていくこと」を求めており、具体的な授業方法として、役割演技（ロールプレイング）やグループ討議、実技指導、実務実習や事例研究、現地調査（フィールドワーク）、模擬授業などを提案している。加えて、上記の4事項それぞれに対する到達目標と目標到達の確認指標例を示しており、資質能力ベースやパフォーマンスベースの指標を用いることで、学生が目標に到達しているかどうかを確認するよう求めている。

以上のような設計のもとで導入された教職実践演習は、すでになんらかの実践事例にもとづく研究が蓄積されている。例えば、必修化に先立って各大学で試行された事例を報告した田宮・下野（2008）や姫野ほか（2011）、全学教職課程における試行事例を報告した檜田ほか（2014）、カリキュラム開発のためのニーズ調査を実施した武田ほか（2013）や小柴ほか（2014）、必修化後の実践を報告した梅津・近藤（2014）などがある。一方で、本格的に実施された教職実践演習の成果や課題を扱った研究はまだ僅少であり、教員養成の質保証という観点からこの科目の意義を明らかにするためには、実証的な分析の蓄積が待たれるところである。

そこで本研究では、静岡大学教育学部で2013年度に実施した教職実践演習の概要を示したうえで、授業終了後に学生に実施したアンケートの結果を分析することで、この科目の成果と課題について検討する。

2. 静岡大学教育学部における教職実践演習の実施概要

静岡大学教育学部では、教職実践演習における授業内容や授業方法の具体的な検討を目的として、教育学部と全学の担当教員、附属学校園の代表者で構成されるワーキンググループ（以下、WG）を立ち上げた。WGでは、2006年中教審答申に示された教職実践演習の制度設計を踏まえながらも、すでに先行実施している短大の事例や他大学の試行事例、附属学校園からの意見や要望、学生の現状などをもとに、以下のような授業の到達目標と学習内容を定めた。

【授業の到達目標】

教員として必要とされる以下の4つの視点から、自らの教職課程での学習と成果をふりかえり、実践力を高めるとともに教員免許を得ることの意味と責任を自覚する。また、今後も専門職として絶えざる研鑽が必要であることを理解し、実践する。

- ①教師としての使命感や責任感のあり方と、教育的愛情の重要性の理解
- ②社会性や対人関係能力の発達と、それらの必要性の理解
- ③幼児・児童・生徒理解の深化
- ④教科の指導力向上

【学習内容】

教員養成での学習を中心に学生生活をふりかえり、現段階の自己の実践的指導力の到達点及び課題を確認するとともに、教職の実践力を高める。

- ①教職履修カルテ等を活用し4年間の足跡をふりかえりつつ、これまで身につけた教員力量の到達点と課題を自己診断する。
- ②専門職としての教育力量の絶えざる向上のため、自己診断、行動計画、実行、確認（いわゆるPDCAサイクル）の考え方を身に付ける。
- ③授業実践力、子ども理解・生徒指導力、学校・学級経営力、危機管理能力ごとに実践的力量的な具体的成果を確認し、課題と欠点を自覚し、それを克服する。
- ④附属学校園や公立学校における授業・研究協議等に支援者またはATとして参加し、現職教員とともに幼児・児童・生徒理解の技法と知見を体験的に学ぶ。
- ⑤学級経営や危機的事態の事例検討を通して、現代学校と教師の役割や責任、子ども理解、社会との関わり方等を確認し、またその資質を高める。

これらの到達目標と学習内容にもとづき、具体的な授業としては、「学習・学生生活のふりかえり」「学級経営」「事例研究」「指導技術」「訪問実習（または学校ボランティア）」「まとめ」を柱とする実施計画を策定した（表1）。さらにWGでは実施計画を策定後、学生向けの『教職実践演習の手引き』と、担当教員向けの『教職実践演習実施要領』をそれぞれ作成した。

2013年度に始まった教育学部の授業では、基本的に4年次後期の木曜5・6時限に開講し、授業内容によっては2コマ連続で実施した。授業形態については授業内容によって異なる。

第1・2回目の「学習・学生生活のふりかえり」では、学生は各専攻・専修単位でクラスにわかれ、教職履修カルテや教育実習の記録等を用いて、あらかじめ『教職実践演習の手引き』に書き込んできた4年間の学びのふりかえりをもとに、自身のこれまでの学びの成果や課題についてグループディスカッションや全体発表で相互に共有した。

第3・4回目の「学級経営」では、学生はまずA組～D組の4クラスにわかれ、外部講師の現職教員から学校・学級経営に関する講話を聞き、その後は各専攻・専修単位でクラスにわかれ、『教職実践演習の手引き』のワークシートを個人で書き込み、それをもとにグループディスカッションをおこない、再度4クラスに戻って現職教員が授業を総括した。

第5・6回目の「事例研究」も同様に、学生はまずA組～D組の4クラスにわかれ、外部講師の現職教員から学校での危機管理に関する講話を聞き、その後は各専攻・専修単位でクラスにわかれ、『教職実践演習の手引き』のワークシートを個人で書き込み、それをもとにグルー

プディスカッションをおこない、再度4クラスに戻って現職教員が授業を総括した。

第7～10回目の「指導技術」では、学生は各専攻・専修単位でクラスにわかれ、教育実習の経験などをふりかえりながら模擬授業を計画・実践し、『教職実践演習の手引き』にある評価シートで模擬授業の反省をおこなった（模擬授業の実施方法は各専攻・専修によって異なる）。

第11～14回目の「訪問実習」では、学生は主に取得免許種にもとづいて7か所ある静岡大学附属学校園に配属され、2日間の訪問日程の中で附属学校園の担当教員から指導を受けながら授業観察やATなどの授業参加をおこない、『教職実践演習の手引き』のワークシートに実習の様子や感想等を記入し、実習をふりかえった。なお、一定の要件を満たす学校ボランティア等の活動をおこなっている場合は、この「訪問実習」を受講したものとみなされた。

第15回目の「まとめ」では、学生は各専攻・専修単位でクラスにわかれ、これまでの授業内容から達成できたこと（身についたこと）と達成できなかったこと（身につかなかったこと）や今後の課題を『教職実践演習の手引き』に書き込み、教職実践演習の成果や課題についてグループディスカッションや全体発表で相互に共有した。

表1 教職実践演習の授業内容（2013年度実施版）

	内容	詳細な内容	主な担当者
1	学習・学生生活のふりかえり	オリエンテーション、PDCAサイクルなど、ふりかえりワークシート記入	各専攻・専修の担当教員
2		ワークシートを元にした、グループでの相互評価、発表、教員講評	
3	学級経営	現職教員による経営書の位置づけについての講話と、具体的作成方法、経営案（概略）の作成、講評	現職教員 各専攻・専修の担当教員（補助）
4			
5	事例研究	安全・健康・危機管理	現職教員 各専攻・専修の担当教員（補助）
6			
7	指導技術	授業案・単元構成のふりかえり	各専攻・専修の担当教員
8		模擬授業・模擬保育	
9		模擬授業・模擬保育	
10		模擬授業・模擬保育	
11	訪問実習 (または学校ボランティア)	附属学校園訪問、アシスタントティーチャー、放課後担当教員との懇談 または学校ボランティア	附属学校園の担当教員
12			
13			
14			
15	まとめ	実践演習のふりかえり	各専攻・専修の担当教員

3. 学生に対するアンケート調査の分析

上記の内容で教職実践演習を実施し、2014年2月の第15回目授業終了時に受講生全員を対象としたアンケート調査をおこなった。アンケートでは、学生の進路や取得免許種といった基本情報、教職実践演習および大学教育全般に対する満足度や達成度、教員として身につけておくべき資質能力の習得度、教職実践演習への意見や感想などを尋ねた。

学生の基本情報は図1～図4の通りである。4年生の2月時点での進路は、「学校教員」の割合が35%と最も高く、次いで「学校教員臨時採用」の24%となっており、正規・非正規を含めて教職に就く学生が6割である。一方で「民間企業」の20%や「大学院進学」の12%など、教職以外の割合も決して少なくないことから、教員免許の取得を希望する学生であっても多様な進路を選択している現状が読み取れる。取得見込の免許状については、中学校一種が最も多く、次いで小学校一種、高等学校一種となっている。なお図には示さないが、小学校一種と中学校一種と高等学校一種のすべてを取得する学生の割合が約64%と最も高く、小学校一種と中学校一種を取得する学生の割合が約14%、中学校一種と高等学校一種を取得する学生の割合が約13%となっている。教員免許以外で取得見込の資格については、総数としては決して多くはないが、学校図書館司書教諭と保育士の資格を取得する学生が一定数いることがわかる。

以下では、主に教職実践演習に対する学生の意識を中心に調査結果を概観し、性別、進路先、教職実践演習全体の満足度の違いによる意識の差について分析する。

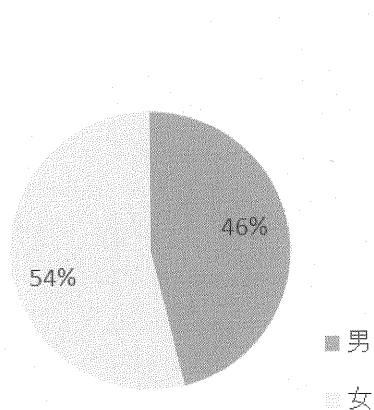


図1 性別 (N=301)

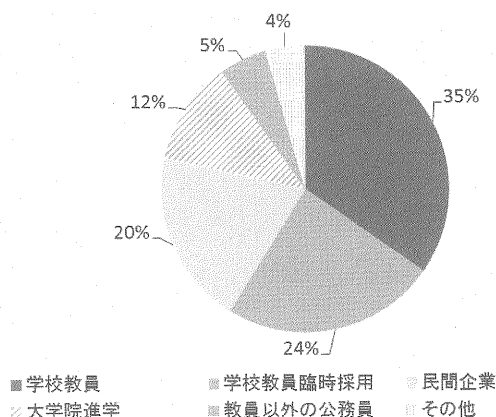


図2 進路予定 (N=299)

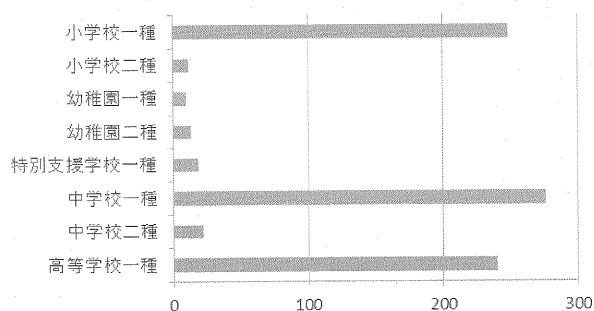


図3 取得見込の免許種 (複数回答可)

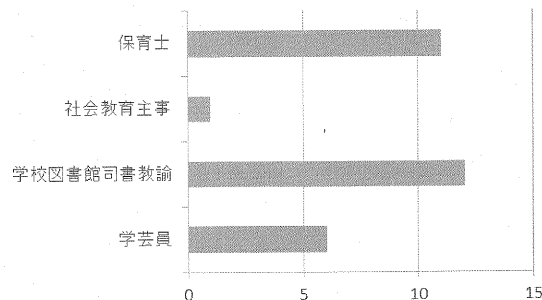


図4 教員免許以外の資格 (複数回答可)

3-1. 教職実践演習に対する意識

ここではまず、教職実践演習として実施された「学習・学生生活のふりかえり」「学級経営」「事例研究」「指導技術」「訪問実習」「学校ボランティア」「まとめ」という7項目の各授業と「教職実践演習全体」の満足度について確認しよう。図5をみると、「学級経営」「事例研究」「指導技術」「学校ボランティア」「まとめ」の5項目では満足（「十分満足」+「やや満足」）の割合が8割以上と評価が高く、特に「学校ボランティア」では「十分満足」の割合が6割以上と突出している。一方で「学習・学生生活のふりかえり」「訪問実習」「教職実践演習全体」では相対的に評価が低く、特に「訪問実習」と「教職実践演習全体」では1割前後の学生が「不満足」としている。

次に、教職実践演習の授業内容や授業方法に対する評価について確認しよう、図6をみると、「担当教員（外部講師を含む）の配置や役割は適切であった」と「授業の実施方法全般（クラス分け、施設設備、資料など）は適切であった」では肯定的（「そう思う」+「少しそう思う」）な割合が8割程度と評価が高く、授業全般の実施方法は妥当と判断されているようである。一方で「『教職履修カルテ』は大学での学びを振り返るために有効であった」と「教職実践演習の事前説明は有効であった」では肯定的な割合が5割に満たないことから、教職実践演習を実施する以前の準備に対して課題を感じていることがわかる。

さらに、教職実践演習を通して達成されたことについて確認しよう。図7をみると、「自己が履修した4年間の教員養成カリキュラムの足跡を振り返りつつ、これまで身につけた資質能力の到達点と課題を自己診断する」「学校現場体験活動（附属学校訪問実習や公立学校ボランティア）を通じて、現職教員とともに子ども理解の技法と知見を体験的に学ぶ」「学校と教師の今日的役割や仕事内容への理解を通じて、教師としての使命感や責任感を獲得する」「仲間との協働的な学びや、学校現場での現職教員との交流などを通じて、社会の中での自己の人間性や、他者とのかかわり等の人間関係能力を養う」の4項目では達成できた（「十分達成できた」+「やや達成できた」）割合が8割以上と評価が高く、その他の5項目でも6割程度が達成できたと評価している。一方で「学校に関わる地域や保護者に関する知識や理解について、自己が身につけた資質能力の具体的成果を確認し、課題を自覚してそれを克服する」では達成できた割合が5割に満たないことから、地域や保護者に関わる学びに課題を感じていることがわかる。

最後に、大学4年間の学びを通して身につけた資質能力について確認しよう。図8をみると、「所属する専攻・専修の専門に関する知識や技能、ものの見方・考え方」では習得できた（「十分習得できた」+「やや習得できた」）割合が9割以上と最も高く、その他の7項目でも8割以上が習得できたとしており、身につけた資質能力に対する評価は高い。一方で「学級経営・行事に関する知識や技能」と「学校に関わる地域や保護者に関する知識や理解」では習得できた割合が6割に満たないことから、相対的にこれらの資質能力は身につけていないと感じていることがわかる。

以上、教職実践演習に対する学生の意識を概観すると、次のことがいえる。第一に、教職実践演習の授業内容や授業方法では、担当教員の役割等を含めた授業全般の実施方法に対する評価は高い一方で、事前説明の方法や教職履修カルテへの記入といった教職実践演習を実施する以前の準備、および成績評価の方法や基準に対する評価が低い。第二に、学校現場での体験的な学びに対する評価は高く、とりわけ「学校ボランティア」の満足度が際立つ一方で、教職実

実践演習の正規授業として実施した「訪問活動」への評価は低く、その実施方法に少なからず不満が生じている。第三に、所属する専攻・専修の専門的な知識や技能をはじめ、教員として身につけておくべき基礎的態度やものの見方、子ども理解や授業実践の能力は概ね身につけていると評価する一方、学級経営に関する知識や技能、および地域や保護者への理解については相対的に不十分さを感じていることがわかる。

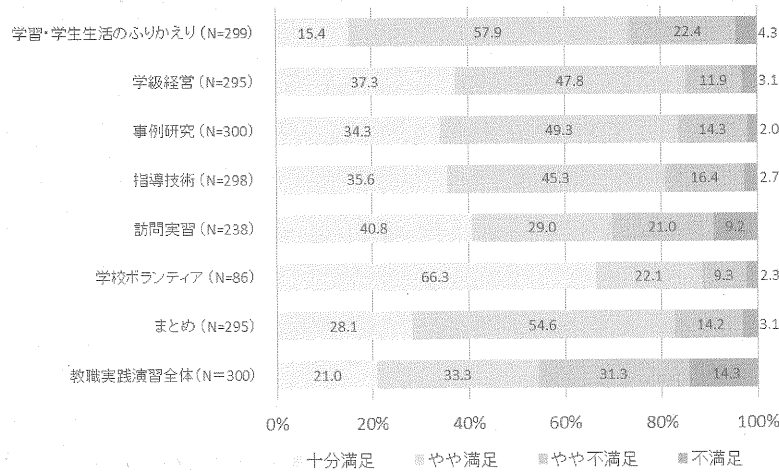


図5 各授業の満足度



図6 実践演習の内容や進め方

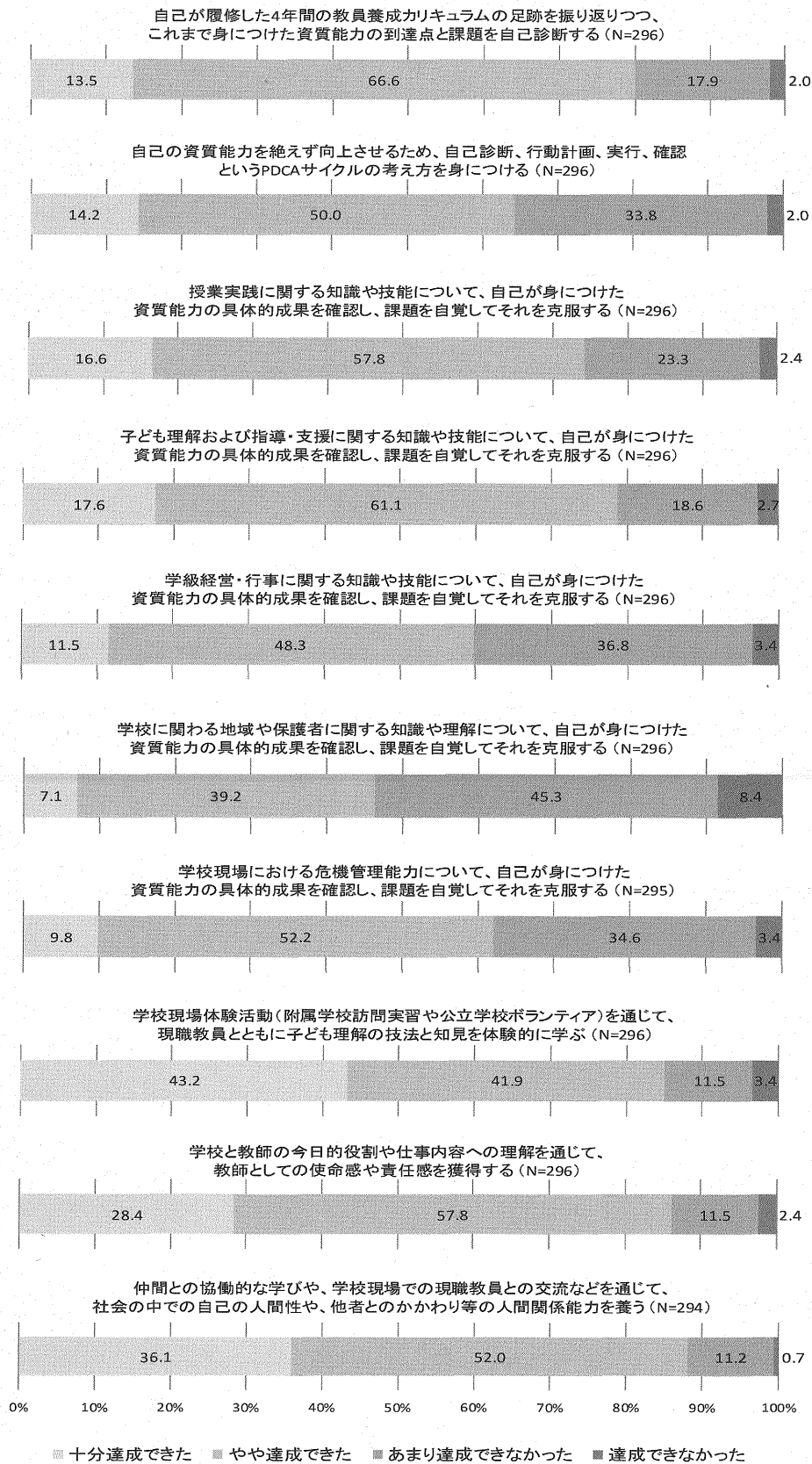


図7 実践演習で達成したこと

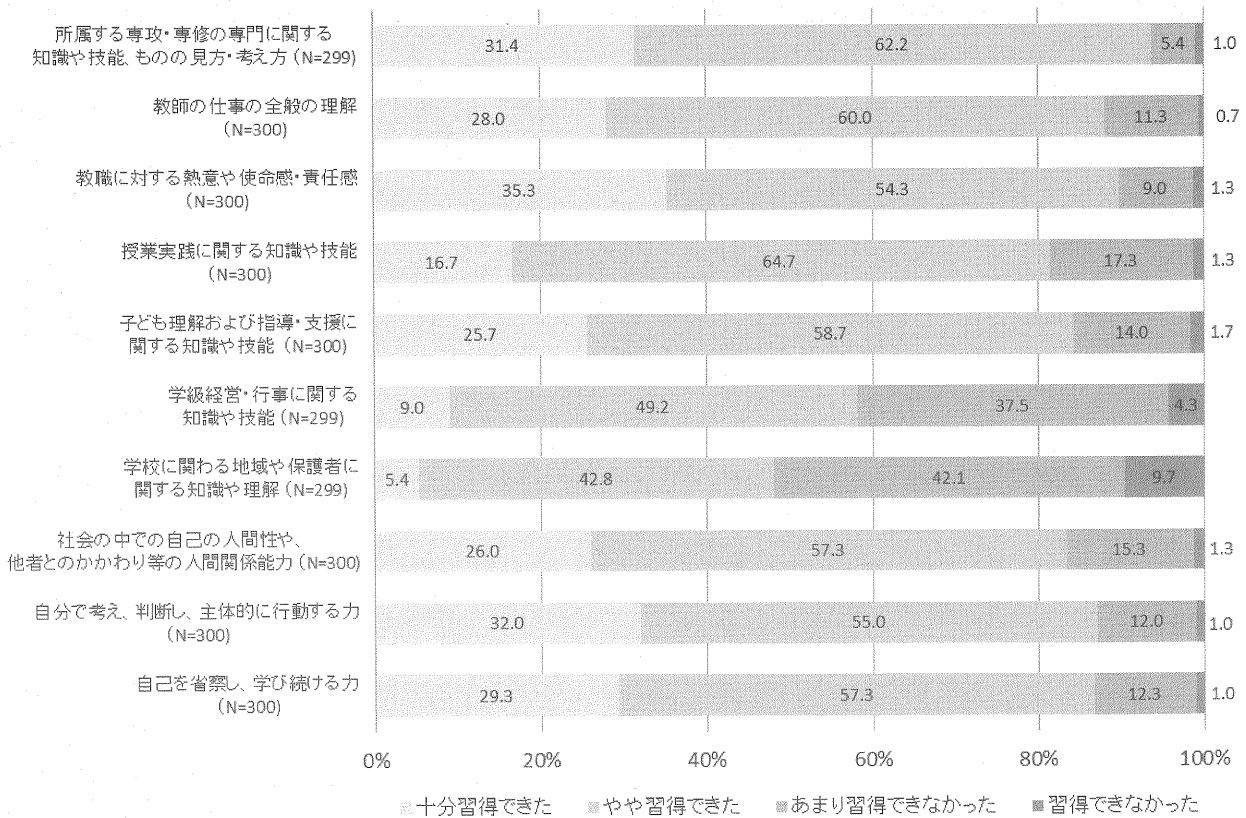


図8 大学で身についた資質能力

3-2. 性別、進路先、教職実践演習全体の満足度の違いによる意識の差

先に図5～図8で確認した、教職実践演習として実施された各授業の満足度（以下、【各授業の満足度】）、教職実践演習の授業内容や授業方法（以下、【実践演習の内容や進め方】）、教職実践演習を通して達成されたこと（以下、【実践演習の達成度】）、大学4年間の学びを通して身についた資質能力（以下、【大学で身についた資質能力】）について、ここでは性別、進路先、教職実践演習全体の満足度の違いによる学生の意識の差を検討する。

まず【各授業の満足度】について表2を確認しよう。性別では「学校ボランティア」と「まとめ」という項目で有意な差がみられ、いずれも「女性」群の平均値が高くなっている。教職実践演習全体の満足度では「学級経営」と「学校ボランティア」以外のすべての項目で有意な差がみられ、いずれも「満足」群の平均値が高くなっている。なお就職先については、いずれの項目でも有意な差はみられなかった。

次に【実践演習の内容や進め方】について表3を確認しよう。性別では「授業を進める上で『手引き』は有効であった」「授業の実施方法全般（クラス分け、施設設備、資料など）は適切であった」「『教職履修カルテ』は大学での学びを振り返るために有効であった」という項目で有意な差がみられ、いずれも「女性」群の平均値が高くなっている。教職実践演習全体の満足度では「成績評価の方法と基準は明確に提示されていた」と「『教職履修カルテ』を記入する授業科目の設定や、記入方法、記入する分量は適切であった」以外のすべての項目で有意な差がみられ、いずれも「満足」群の平均値が高くなっている。なお就職先については、いずれの項目でも有意な差はみられなかった。

さらに【実践演習の達成度】について表4を確認しよう。性別では「自己が履修した4年間の教員養成カリキュラムの足跡を振り返りつつ、これまで身につけた資質能力の到達点と課題を自己診断する」と「仲間との協働的な学びや、学校現場での現職教員との交流などを通じて、社会の中での自己の人間性や、他者とのかかわり等の人間関係能力を養う」という項目で有意な差がみられ、いずれも「女性」群の平均値が高くなっている。就職先では「学校現場体験活動（附属学校訪問実習や公立学校ボランティア）を通じて、現職教員とともに子ども理解の技法と知見を体験的に学ぶ」と「学校と教師の今日的役割や仕事内容への理解を通じて、教師としての使命感や責任感を獲得する」という項目で有意な差がみられ、いずれも「教員」群の平均値が高くなっている。教職実践演習全体の満足度では「学校に関わる地域や保護者に関する知識や理解について、自己が身につけた資質能力の具体的成果を確認し、課題を自覚してそれを克服する」「学校と教師の今日的役割や仕事内容への理解を通じて、教師としての使命感や責任感を獲得する」「仲間との協働的な学びや、学校現場での現職教員との交流などを通じて、社会の中での自己の人間性や、他者とのかかわり等の人間関係能力を養う」という項目で有意な差がみられ、いずれも「満足」群の平均値が高くなっている。

最後に【大学で身につけた資質能力】について表5を確認しよう。性別では「社会の中での自己の人間性や、他者とのかかわり等の人間関係能力」という項目で有意な差がみられ、「女性」群の平均値が高くなっている。就職先では「教職に対する熱意や使命感・責任感」という項目で有意な差がみられ、「教員」群の平均値が高くなっている。教職実践演習全体の満足度では「学校に関わる地域や保護者に関する知識や理解」「社会の中での自己の人間性や、他者とのかかわり等の人間関係能力」「自分で考え、判断し、主体的に行動する力」「自己を省察し、学び続ける力」という項目で有意な差がみられ、いずれも「満足」群の平均値が高くなっている。

以上、性別、進路先、教職実践演習全体の満足度の違いによる意識の差をみると、次のことがいえる。まず性別について、「男性」群と「女性」群の間でそれほど大きな違いは生じていないものの、相対的に「女性」群の評価が高くなっている。特に、自己の人間性や人間関係能力の育成に関わる項目で、その傾向が顕著であった。次に就職先について、【各授業の満足度】と【実践演習の内容や進め方】では有意な差がみられず、「教員」群と「教員以外」群の間で意識の違いは生じていなかった。【実践演習の達成度】と【大学で身につけた資質能力】でも有意な差がみられたのは合計してわずかに3項目であり、教師としての使命感や責任感に関わる項目で、「教員」群の評価が高いという傾向であった。最後に教職実践演習全体の満足度について、【各授業の満足度】と【実践演習の内容や進め方】ではほとんどの項目で有意な差がみられ、教職実践演習の全体的な満足度と、個別の授業内容・授業方法に対する評価との関連性が強いことがわかった。一方で【実践演習の達成度】と【大学で身につけた資質能力】で有意な差がみられた項目は限定的であり、地域や保護者に関わる項目や、自己の人間性や人間関係能力の育成に関わる項目で、「満足」群の評価が高いものの、個別の授業内容・授業方法に対する評価と比べれば、教職実践演習の全体的な満足度と、達成度や身につけた資質能力との関連性は強くはない。

表2 【各授業の満足度】のT検定

【各授業の満足度】	性別	N 平均値		就職先	N 平均値		教職実践演習全体の満足度		N 平均値	
学習・学生生活のふりかえり	男	138	2.76	教員	175	2.86	満足	162	2.98	**
	女	161	2.91	教員以外	124	2.81	不満足	137	2.69	
学級経営	男	134	3.16	教員	171	3.26	満足	158	3.25	
	女	161	3.22	教員以外	124	3.10	不満足	137	3.13	
事例研究	男	138	3.09	教員	175	3.21	満足	163	3.24	*
	女	162	3.22	教員以外	125	3.09	不満足	137	3.07	
指導技術	男	138	3.10	教員	175	3.17	満足	163	3.26	**
	女	160	3.17	教員以外	123	3.10	不満足	135	2.99	
訪問実習	男	112	3.03	教員	134	3.11	満足	131	3.30	***
	女	126	3.00	教員以外	104	2.88	不満足	107	2.66	
学校ボランティア	男	40	3.33	教員	58	3.59	満足	45	3.64	
	女	46	3.70	教員以外	28	3.39	不満足	41	3.39	
まとめ	男	138	2.96	教員	174	3.09	満足	161	3.25	***
	女	157	3.18	教員以外	121	3.06	不満足	134	2.87	

注1) * p<0.05, ** p<0.01, *** P<0.001

注2) 平均値は、「十分満足=4」～「不満足=1」の4件法で算出した。

注3) 教職実践演習全体の満足度は、「十分満足」+「やや満足」=「満足」、「やや不満足」+「不満足」=「不満足」とした。

表3 【実践演習の内容や進め方】のT検定

【実践演習の内容や進め方】	性別	N 平均値		就職先	N 平均値		教職実践演習全体の満足度		N 平均値	
授業の到達目標は明確に提示されていた	男	137	2.71	教員	173	2.78	満足	160	2.93	**
	女	160	2.84	教員以外	124	2.77	不満足	137	2.60	
授業の構成や内容は適切であった	男	138	2.83	教員	175	2.86	満足	163	3.05	***
	女	161	2.79	教員以外	124	2.74	不満足	136	2.52	
担当教員(外部講師を含む)の配置や役割は適切であった	男	138	3.20	教員	175	3.26	満足	163	3.37	**
	女	162	3.31	教員以外	125	3.26	不満足	137	3.12	
授業を進める上で『手引き』は有効であった	男	138	2.54	教員	174	2.68	満足	163	2.87	**
	女	160	2.87	教員以外	124	2.77	不満足	135	2.54	
成績評価の方法と基準は明確に提示されていた	男	138	2.51	教員	175	2.57	満足	163	2.63	
	女	162	2.62	教員以外	125	2.56	不満足	137	2.49	
授業の実施方法全般(クラス分け、施設設備、資料など)は適切であった	男	138	2.90	教員	174	3.02	満足	163	3.18	***
	女	161	3.12	教員以外	125	3.02	不満足	136	2.82	
「教職履修カルテ」を記入する授業科目の設定や、記入方法、記入する分量は適切であった	男	138	2.61	教員	173	2.67	満足	162	2.72	
	女	160	2.71	教員以外	125	2.66	不満足	136	2.60	
「教職履修カルテ」は大学での学びを振り返るために有効であった	男	138	2.21	教員	174	2.37	満足	162	2.56	***
	女	161	2.48	教員以外	125	2.34	不満足	137	2.12	
夏休み中の課題(『手引き』P9～P11)の分量や内容は適切であった	男	138	2.75	教員	175	2.78	満足	163	2.87	**
	女	162	2.73	教員以外	125	2.68	不満足	137	2.58	
『手引き』の各ワークの分量や内容は適切であった	男	137	2.64	教員	173	2.72	満足	162	2.83	**
	女	161	2.80	教員以外	125	2.73	不満足	136	2.59	
教職実践演習の事前説明は有効であった	男	138	2.38	教員	173	2.46	満足	162	2.70	***
	女	160	2.55	教員以外	125	2.49	不満足	136	2.20	
訪問実習代替措置(代替ボランティア)の事前説明や諸手続きは有効であった	男	62	2.84	教員	81	2.79	満足	71	2.94	*
	女	78	2.71	教員以外	59	2.73	不満足	69	2.58	
訪問実習の事前指導は有効であった	男	108	2.64	教員	127	2.65	満足	126	2.87	***
	女	122	2.58	教員以外	103	2.55	不満足	104	2.30	

注1) * p<0.05, ** p<0.01, *** P<0.001

注2) 平均値は、「そう思う=4」～「そう思わない=1」の4件法で算出した。

注3) 教職実践演習全体の満足度は、「十分満足」+「やや満足」=「満足」、「やや不満足」+「不満足」=「不満足」とした。

表4 【実践演習の達成度】のT検定

【実践演習の達成度】	性別	N	平均値	就職先	N	平均値	教職実践演習 全体の満足度	N	平均値
自己が履修した4年間の教員養成カリキュラムの足跡を振り返りつつ、これまで身につけた資質能力の到達点と課題を自己診断する	男	134	2.84	教員	174	2.95	満足	161	2.98
	女	162	2.98	教員以外	122	2.87	不満足	135	2.84
自己の資質能力を絶えず向上させるため、自己診断、行動計画、実行、確認というPDCAサイクルの考え方を身につける	男	134	2.80	教員	174	2.77	満足	161	2.80
	女	162	2.73	教員以外	122	2.75	不満足	135	2.73
授業実践に関する知識や技能について、自己が身につけた資質能力の具体的な成果を確認し、課題を自覚してそれを克服する	男	134	2.89	教員	174	2.95	満足	161	2.94
	女	162	2.88	教員以外	122	2.80	不満足	135	2.82
子ども理解および指導・支援に関する知識や技能について、自己が身につけた資質能力の具体的な成果を確認し、課題を自覚してそれを克服する	男	134	2.89	教員	174	2.97	満足	161	2.97
	女	162	2.98	教員以外	122	2.89	不満足	135	2.90
学級経営・行事に関する知識や技能について、自己が身につけた資質能力の具体的な成果を確認し、課題を自覚してそれを克服する	男	134	2.72	教員	174	2.69	満足	161	2.69
	女	162	2.65	教員以外	122	2.66	不満足	135	2.67
学校に関わる地域や保護者に関する知識や理解について、自己が身につけた資質能力の具体的な成果を確認し、課題を自覚してそれを克服する	男	134	2.44	教員	174	2.44	満足	161	2.55
	女	162	2.46	教員以外	122	2.46	不満足	135	2.33
学校現場における危機管理能力について、自己が身につけた資質能力の具体的な成果を確認し、課題を自覚してそれを克服する	男	133	2.67	教員	173	2.69	満足	160	2.74
	女	162	2.70	教員以外	122	2.67	不満足	135	2.61
学校現場体験活動(附属学校訪問実習や公立学校ボランティア)を通じて、現職教員とともに子ども理解の技法と知見を体験的に学ぶ	男	134	3.29	教員	174	3.39	満足	161	3.30
	女	162	3.22	教員以外	122	3.06	不満足	135	3.19
学校と教師の今日的役割や仕事内容への理解を通じて、教師としての使命感や責任感を獲得する	男	134	3.04	教員	174	3.20	満足	161	3.25
	女	162	3.19	教員以外	122	3.02	不満足	135	2.97
仲間との協働的な学びや、学校現場での現職教員との交流などを通じて、社会の中での自己の人間性や、他者とのかかわり等の人間関係能力を養う	男	133	3.13	教員	173	3.24	満足	160	3.34
	女	161	3.32	教員以外	121	3.22	不満足	134	3.10

注1) * p<0.05, ** p<0.01, *** P<0.001

注2) 平均値は、「十分達成できた=4」～「達成できなかった=1」の4件法で算出した。

注3) 教職実践演習全体の満足度は、「十分満足」+「やや満足」=「満足」、「やや不満足」+「不満足」=「不満足」とした。

表5 【大学で身につけた資質能力】のT検定

【大学で身につけた資質能力】	性別	N	平均値	就職先	N	平均値	教職実践演習 全体の満足度	N	平均値
所属する専攻・専修の専門に関する知識や技能、ものの見方・考え方	男	138	3.20	教員	175	3.28	満足	163	3.25
	女	161	3.27	教員以外	124	3.19	不満足	136	3.24
教師の仕事の全般の理解	男	138	3.12	教員	175	3.14	満足	163	3.18
	女	162	3.18	教員以外	125	3.18	不満足	137	3.12
教職に対する熱意や使命感・責任感	男	138	3.23	教員	175	3.37	満足	163	3.26
	女	162	3.24	教員以外	125	3.05	不満足	137	3.21
授業実践に関する知識や技能	男	138	3.01	教員	175	2.99	満足	163	3.01
	女	162	2.93	教員以外	125	2.93	不満足	137	2.92
子ども理解および指導・支援に関する知識や技能	男	138	3.02	教員	175	3.06	満足	163	3.10
	女	162	3.14	教員以外	125	3.12	不満足	137	3.06
学級経営・行事に関する知識や技能	男	138	2.64	教員	175	2.63	満足	162	2.69
	女	161	2.62	教員以外	124	2.63	不満足	137	2.56
学校に関わる地域や保護者に関する知識や理解	男	138	2.37	教員	175	2.40	満足	162	2.54
	女	161	2.50	教員以外	124	2.49	不満足	137	2.32
社会の中での自己の人間性や、他者とのかかわり等の人間関係能力	男	138	2.97	教員	175	3.05	満足	163	3.18
	女	162	3.17	教員以外	125	3.13	不満足	137	2.96
自分で考え、判断し、主体的に行動する力	男	138	3.14	教員	175	3.15	満足	163	3.28
	女	162	3.21	教員以外	125	3.22	不満足	137	3.07
自己を省察し、学び続ける力	男	138	3.10	教員	175	3.10	満足	163	3.23
	女	162	3.19	教員以外	125	3.22	不満足	137	3.06

注1) * p<0.05, ** p<0.01, *** P<0.001

注2) 平均値は、「十分習得できた=4」～「習得できなかった=1」の4件法で算出した。

注3) 教職実践演習全体の満足度は、「十分満足」+「やや満足」=「満足」、「やや不満足」+「不満足」=「不満足」とした。

4. 考察

ここまでの分析結果をもとに、2013年度に実施された教職実践演習の成果と今後の課題をまとめる。

まず成果について、教職実践演習の授業内容や授業方法では、担当教員の役割等を含めた授業全般の実施方法に対する評価は高く、教職実践演習を通して達成されたことも、ほぼすべての項目で6割以上の学生が肯定的に回答していた。このことから、実施初年度の基本的な授業

設計はおおむね妥当であるといえよう。また、教職実践演習は4年次後期に実施されることから、すでに学生の進路が決定している状況で、教職に就く学生とそうでない学生との間のモチベーション等に差が生じてしまう恐れもあったが、上記の分析結果をみる限り、進路先による差異は限定的である。実際、教職実践演習全体の満足度についても、進路先による差はみられなかった⁽¹⁾。すなわち、教職実践演習という授業自体が充実して有意義なものであれば、教職に就くかどうかに関わらず、どのような学生でも肯定的に評価し、成長に寄与しうることが示唆されるのである。ただしここで留意しなければならないのは、この結果が教員免許状の質保証に直結するとは言い切れないことである。アンケート調査に対する学生の自由記述からは、4年次後期という大学生活最後の時期に、同じ専攻・専修等の学生同士が協働的な学びを展開することに肯定的な意見もみられ、「良い思い出づくり」というバイアスが評価に反映されていることは否めない⁽²⁾。もちろんそこにも何らかの教育的な成果を見出すことはできるだろうが（例えば、自己の人間性や人間関係能力の育成といった社会人としての成長など）、教職遂行能力を包括的に育成し、教員免許状の質を保証しているのかどうかについては、なお詳細に分析しなければならない。

次に課題について、教職実践演習の授業内容や授業方法では、事前説明の方法や教職履修カルテへの記入といった教職実践演習を実施する以前の準備、および成績評価の方法や基準に対する評価が低かった。とりわけ事前説明や教職履修カルテについては、この科目が学部段階における「学びの軌跡の集大成」と位置づけられていることから、それまでの学びを総括するための準備をさらに入念におこなう工夫が必要となる。具体的には、教職実践演習でのふりかえりに有効となるような教職履修カルテの見直しおよび改定（『教職実践演習の手引き』の改定も含む）、入学後から段階的・継続的な学びのふりかえりができるようなカリキュラムの設計、4年次の事前説明会における教職実践演習の位置づけの理解促進などが挙げられよう。すなわち、教職実践演習で教育的な成果を高めるためには、実際の15回の授業設計自体を検討するとともに、4年間の学びの中に教職実践演習をどう位置づけ、それまでにどのような準備をしておくのかということも、十分に検討する必要があるといえよう。さらに、教職実践演習の成果をどのような指標で確認するのかということにも課題がある。上記の分析では、教職実践演習全体の満足度は、個別の授業内容・授業方法に対する評価との関連性が強い一方で、達成度や身についた資質能力との関連性は限定的であった。すなわち、教職実践演習に対する学生の主観的な満足度を担保することが、必ずしも教職実践演習の達成度や身についた資質能力に直結するわけではなく、先にも述べたように教職実践演習が「うまくいく」ことが教員免許状の質保証に寄与しているかどうかは慎重に議論しなければならない。

注

- (1) 教職実践演習全体の満足度と学生の進路先についてカイ二乗検定を用いて分析したところ、有意な差は確認されなかった。

		就職先		
		教員	教員以外	合計
教職実践演習 全体の満足度	満足	55.4% (97)	52.8% (66)	54.3% (163)
	不満足	44.6% (78)	47.2% (59)	45.7% (137)
	合計	100.0% (175)	100.0% (125)	100.0% (300)

注) $\chi^2=0.652$ 、カッコ内は度数。

- (2) アンケート調査では、教職実践演習の各授業内容を通して気がついたことや要望などを自由に記述できる回答欄も設けた。その中では、「4年間で学んできた教職のための授業について、一緒に学んできた仲間と振り返ることができてよかった」や「同じ専修の人と最後の半年間にディスカッションやグループワークなどの授業ができて楽しかった」といった意見が確認された。

参考文献

- 高橋望, 2008, 「教員養成制度改革に関する一考察—教職実践演習(仮称)の導入過程に焦点をあてて—」『東北大学大学院教育学研究科研究年報』第57集第1号, pp.87-101.
- 田宮弘宣・下野浩二, 2008, 「教育学部以外の学生を対象とした『教職実践演習(仮称)』の試行—卒業後のアンケートから見えること—」『鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要』第18巻, pp.209-219.
- 姫野完治・石橋研一・神居隆・斎藤孝, 2011, 「教職実践演習のカリキュラム開発と試行」『秋田大学教育文化学部教育実践研究紀要』第33号, pp.123-132.
- 樫田健志・高旗浩志・三島知剛・江木英二・曾田佳代子・後藤大輔・佐藤大介・山根文男・加賀勝, 2014, 「全学教職課程における『教職実践演習への取組』(2)—試行の成果と課題及び本格実施の実際—」『岡山大学教師教育開発センター紀要』第4号, pp.123-132.
- 武田明典・村瀬公胤・八木雅之・宮木昇・嶋崎政男, 2013, 「教職実践演習のカリキュラム開発—初任教員のニーズ調査—」『神田外語大学紀要』第25号, pp.307-330.
- 小柴孝子・武田明典・村瀬公胤, 2014, 「中・高生が求める理想の教師像—『教職実践演習』カリキュラム開発のために—」『神田外語大学紀要』第26号, pp. 489-569.
- 梅津徹郎・近藤健一郎, 2014, 「教職必修科目『教職実践演習』の取り組みをふりかえって」『北海道大学教職課程年報』第4号, pp.1-14.

付記

本研究は、平成25-27年度科学研究費助成事業(基盤研究(B))「自律的に学び続ける教師の核となる資質・能力の解明と質保証に関する研究」(研究代表者:浦野弘)の成果の一部である。